

アスペクト表現のテイル分類の再検討：中国人の日本語学習者の場合

徐, 莉
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494650>

出版情報：比較社会文化研究. 21, pp.21-28, 2007-03-10. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

アスペクト表現のテイル分類の再検討

— 中国人の日本語学習者の場合 —

ジョ
徐

リ
莉

1. はじめに

20世紀に入ってからテイルについての日本語のアスペクト研究は、松下大三郎(1901,1924)から始まる。金田一春彦(1950,1955)は、アスペクトをシステムとしてうちだし、アスペクトの観点から動詞の分類を提出した。その後、アスペクト研究を発展させたのは奥田靖雄、高橋太郎、工藤真由美などである。一方、寺村秀夫(1984)は日本語学的立場からのアスペクト研究の基礎を作った¹。

上記のように今まで、日本語のテイルに関する文法研究は数多く行われてきたが、中国人の日本語学習者の立場から考えたテイル分類はまだ見当たらない。発想の違いにより、中国人の日本語学習者がテイルの表現方法をうまく把握できないことは知られている。そのため、本論では、日本語のアスペクト表現と中日両語のアスペクト表現の相違との両面を踏まえ、中国人の日本語学習者のためのテイル分類を検討してみる。

2. テイル形の意味

テイル形について、多くの研究が出されてきたが、今世紀後半の出発点となったのは、金田一(1950)の動詞の四分類(状態動詞、継続動詞、瞬間動詞、第四種の動詞)である。金田一(1950)の「動詞自体がもつ相(アスペクト)」という言い方によると、テイル形は二つの基本的な意味に分かれる。それは、(一)動作や現象が継続していることを表す場合と、(二)ある過去(以前)の出来事が終わって、その結果がいまある状態として残っていることを表す場合である。すなわち、金田一の動詞分類においては、「継続動詞」は一般に(一)の意味に、「瞬間動詞」は(二)の意味になる。奥田(1977,1978)は、テイル形の基本的な意味

は「継続」ということで一つであるとし、「主体の動作」を表す動詞の場合は(一)、「主体の変化」を表す場合は(二)の意味が実現すると説明した。しかし、動詞が「継続動詞」或いは「主体の動作」を表すものであっても、テイル形が(二)の意味になることがあり、逆に、「瞬間動詞」或いは「主体の変化」を表すものであってもテイル形が(一)の意味で使われることがあることが、これまでに多くの人々によって指摘され、そのような意味を決定するのにどういう要因が働いているかについていろいろ議論が行われてきた。寺村(1984)は点と線の論説を使って、テイル形の意味に解釈を加えた。工藤(1982,1995)は先の奥田論文を承けて、さらに詳しい動詞の下位分類を行い、上の二つの基本的意味と「派生的」意味の説明に結び付け、論じた。

本論では、上記の先行研究を参考にし、主に工藤(1995)をもとにし、テイル形の基本的な意味として「動作の継続」と「結果の継続」²に設定し、さらにその派生的な意味として「パーフェクト」³、「習慣」³、「単なる状態」に分類する。

テイル形の基本的意味は、「動作の継続」であれ、「結果の継続」であれ、「継続」である。「パーフェクト」と規定している派生的意味は、従来「経験・記録」用法と言われることが多かったのであるが、「経験・記録」という規定では、非包括的・非本質的であると思われる。「パーフェクト」は「継続」と異なり、後続時点における、それ以前に成立した運動の効力の現存を表すものである。例を取ってみれば「その本なら、一度読んでよ」、「私が十年したら、子供を生んでいるに違いない」などである。「パーフェクト」という派生的意味では、アスペクトとテンスとが、複合されていて、単純なアスペクトの意味ではない。「習慣」は個別・具体的な時間における運動の現象化をとらえる「継続」と異なり、幅広い期間において繰り返し起こる運動をとら

¹日本語のアスペクトの研究史については、高橋(1976:331-356)、庵(2001:152-156)を参照。

²テイル形の用法の名づけについてはいろいろな言い方がある。例えば、「動作の持続」以外には「進行の状態」(高橋1969)、「進行中」(庵2001)などがある。工藤(1995)ではテイルの基本的意味とする二つの用法は「動作の継続」と「結果変化の継続」と名づけた。本論では、筆者なりに「動作の継続」、「結果の継続」という言い方を用いる。

³工藤(1995)には「反復」という言い方が用いられている。この言い方以外には「習慣」、「繰り返し」もよく使われている。本論では、「反復」にしる、「繰り返し」にしる、場合によると、「動作の継続」に解釈する可能性があるので、「習慣」という言い方を使う。

えるものである。例えば、「あの子は、マンガばかり読んでいる」、「私はこの頃毎日10キロ走っている」など、「習慣」という派生的意味も、単純なアスペクト的意味ではなく、時間的限定性の抽象化とアスペクト的把握(運動の複数性)とが複合化されている。寺村(1984)によると、一つ一つは点(ひとまとまり性・限界達成性)だが、連続して線(継続性があるもの)としてとらえられる。「単なる状態」は、もはや時間のなかでの展開性を問題にしなくなって、ものの性質や空間的配置関係をとらえるものである。従って、この派生的意味は、脱アスペクト化していることになる。「この作品が優れている」、「山が聳えている」のような表現は、形容詞的な用法とも言われている⁴。

こうして、本論では、アスペクト表現のテイル形は、「継続」、「パーフェクト」、「習慣」という三つの意味からなるとする。脱時間的用法の「単なる状態」は脱アスペクト化しているので、アスペクト表現の問題と見なされていないため、本論では、考察しない。

3. 日本語動詞の分類とテイル形

工藤(1995: 61-69)によると、基本的なアスペクト的意味「完成性」、「継続性」は、語彙の意味と相関性がある。派生的意味「パーフェクト性」、「反復性」は、基本的に語彙的なものから解放される。アスペクト研究において、動詞分類が重要な意味をもつのは、文法的アスペクト対立が抽象的なものであるがゆえに、語彙の意味のタイプに応じて具体化されるからであると指摘した。

工藤(1995)の日本語動詞の分類は大きく「外的運動動詞」(開ける、座る、食べるなど)、「内的情態動詞」(思う、望む、疲れるなど)、「静態動詞」(ある、異なる、優れるなど)という三つに分ける。まず、アスペクト対立の有無という観点から、時間的展開性のない(アスペクトの対立がない)「静態動詞」と時間のなかでの展開性のある(アスペクトの対立がある)「運動動詞」⁵に分類できる。この2分類はほかの研究者たちによっても行われたが、違うのは、「思う、考える、心配する、疲れる、感じる」のような情態を表す一群の動詞が存在するという点である。この動詞グループは以上の2分類のどちらにも収めることができない。この動詞グループは「運動動詞」と共通して、時間的展開性があるが、「運動動詞」(外的事象動詞)と異なり、「思考・感情・知覚・感覚」という人の内的事象ととらえ、話し手のみが直接感知・体験できるものである。この点に

ついては、工藤(1995)は、「どのような言語においても、このような内的情態動詞は、アスペクト的に特殊なものとなるのではないだろう」と述べた。筆者も同じ考えを持っている。

さらに、工藤(1995)は奥田の「動作」か「変化」かという観点と、「主体」か「客体」かという観点を組み合わせ、「外的運動動詞」に対し、下位分類を行った。その分類とは、

- A.1 主体動作・客体変化動詞
例：開ける、折る、消す、倒す、曲げる、入れるなど
- A.2 主体変化動詞
例：行く、来る、帰る、立つ、並ぶ、開く、折れるなど
- A.3 主体動作動詞
例：動かす、回す、打つ、蹴る、押す、食べる、見るなど
- 動詞の分類とアスペクトとの関係はテイル形の基本的意味で言えば、次のようになる。

A.1 主体動作・客体変化動詞	動作の継続
A.2 主体変化動詞	結果の継続
A.3 主体動作動詞	動作の継続

工藤(1995: 71-73)によると、主体動作・客体変化動詞は、主体の観点からは動作を、客体の観点からは変化をとらえていて、すべて他動詞である。他動詞であるがゆえに、能動と受動の対立があって、能動では「動作の継続」を表すが、受動⁶では「結果の継続」を表すことになる。主体変化動詞は、基本的に自動詞であって、「結果の継続」を表す。主体動作動詞には自動詞も他動詞も所属しているが、動作のみをとらえているのである。他動詞の場合、能動-受動の対立がアスペクト的意味の違いに結びつかず、どちらであっても、「動作の継続」を表す。

4. 中日両語のアスペクト表現の異同

以上、日本語のテイルの意味及び日本語動詞とテイル形との相関性について述べてきた。しかし、中国語のアスペクト表現は日本語と必ず一致するとは言えない。例えば、日本語の「彼はご飯を食べている」という文を中国語に訳すと、“他在吃饭”である。「彼は結婚している」は“他结婚了”となる。また「彼は疲れている」も同じ、“他累了”で表現する。「ご飯を食べている」の方は、中国語においても継続相をとるが、「結婚している」、「疲れている」は完了相で表す。日本語では、どちらも「～ている」の形であるのに対し、中国語では「結婚している」、「疲れている」ではなく、「結婚した」、「疲れた」と言う。

⁴寺村(1984: 137-144)はこの用法を「形容詞的用法」と扱っている。

⁵これまでの研究では、「静態動詞」と対照して、「動態動詞」という言い方が多かった。

⁶本論では、「能動」の表現だけを考察し、「受動」の表現を問題外のこととするので、「能動」を特別に説明・表記しない。

近年以来、中日交流の発展に伴い、中国語と日本語の対照研究が多く進められている。そのなかに中日両語のアスペクト表現の比較に関する研究もたくさんある。本節では最近注目されている研究論文を参考にし、中日両語のアスペクト表現の異同について説明していく。

まず、テンスとアスペクトの体系について、次の二つの表を比べてみる。

日本語のテンス・アスペクトの体系表⁷

		アスペクト	
		完成相	継続相
テンス	非過去	ル形	テイル形
	過去	タ形	テイタ形

中国語のテンス・アスペクトの体系表⁸

		アスペクト	
		完成相	継続相
テンス	非過去	標記ゼロ型(基本形)	標記型(在・呢 ⁹ ・着)
	過去	標記型(了)	

この二つの表から分かるように、まず、完成相の場合、中国語は、日本語と同じ、非過去の完成相も過去の完成相もある。いっぽう、継続相については、中国語は日本語のテイル形とテイタ形のようなテンスの対立的な形態が存在しない。ただアスペクトの形態として表記があるにすぎない。下記の例のように継続相のテンスを表すには時間副詞か文脈に頼るしかない。

(1) 過去の動作の継続を表す

她 当时 正 在 看 书。
彼女 その時 ちょうど ~ている 読む 本
(彼女はその時、ちょうど本を読んでいた)

(2) 現在の動作の継続を表す

她 现在 看 电视 呢。
彼女 今 見る テレビ ~ている
(彼女は今テレビを見ている)

(3) 未来の動作の継続を表す

你 明天 来 的 时候, 我 可能 在 学习。
あなた 明日 来る の とき 私 多分 ~ている 勉強する
(あなたが明日来るとき、私は多分勉強している)

次は、動詞の分類とアスペクト表現との関わりについて中日の異同を説明する。動詞は種々の基準によって分類することができ、分類の目的や用途によって分類の仕方も異なる。王(1999)は工藤(1995)とC.E.ヤーホントフ(1987)などの見解を受け入れ、アスペクトを研究するための中国語動詞の分類を提示し、動詞の種類によって実現したアスペクトの意味が異なることを明らかにした。

王(1999)は中国語の動詞をまず、大きく四つに分けた。

一) 動作動詞

—— 主体の動作を表す

例: 切(切る)、割(割る)、炒(炒める)、买(買う)、笑(笑う)、唱(歌う)など

二) 変化動詞

—— 主体の変化を表す

例: 穿(着る)、坐(座る)、折(折れる)、塌(崩れる)、来(来る)、结婚(結婚する)、出生(生まれる)、及格(合格する)など

三) 心理活動動詞

—— 主体の心理活動を表す

例: 想(思う)、思考(考える)、担心(心配する)、希望(希望する)、知道(知る)、相信(信じる)、忘记(忘れる)など

四) 属性動詞

—— 主体の属性を表す(アスペクトの対立がない)

例: 存在を表すもの: 有(ある/いる)、在(ある/いる)、存在(存在する)、など

関係を表す: 是(~である)、属于(属する)など

能願動詞(助動詞): 能(できる)、想(~したい)、会(できる)など

動詞の分類と継続相との関係について言えば、次のようになる。

一) 「動作動詞」には、主体の動作のみを表す動詞だけではなく、主体が客体に働きかけ、変化を与えることを表す動詞も含まれる。従って、「動作動詞」はさらに「主体動作動詞」と「主体動作・客体変化動詞」に分けられる¹⁰。「動作動詞」は「主体動作動詞」であれ、「主体動作・客体変化動詞」であれ、継続相“在”、“呢”をつけたら、基本的に「動作の継続」を表す。この点については日本語とは大きな違いはないと言える。

⁷日本語のテンス・アスペクトの体系化を行ったのは奥田(1977)、鈴木(1979)である。その後、この体系表が多くの研究者たちに認められ、現在までよく用いられている。

⁸中国語のアスペクトとテンスの体系表は徐(2006)によるものを修正したものである。

⁹植田、楊等(1998: 51)によると、「“呢”は動作の進行を表すほか、ある種の語気を含むことがよくある」という。徐(2006)はこの観点から同意する立場から上記の表を作った。

¹⁰王(1999)の「主体動作動詞」は「“摸”(触る)、“推”(押す)、“喝”(飲む)、“研究”(研究する)、“说”(話す)、“走”(走る)、“玩”(遊ぶ)」などのような動詞である。「主体動作・客体変化動詞」は「“煮”(煮る)、“切”(切る)、“刻”(刻む)、“收集”(収集する)、“给”(あげる)、“寄”(郵送する)」などのような動詞が挙げられる。

- (4) 孩子們 正 在 玩 。
子供達 ちょうど ~ている 遊ぶ
(子供たちがちょうど遊んでいる)
- (5) 父親 現在 正 在 吃 晚饭。
父 今 ちょうど ~ている 食べる 夕飯
(父は今、ちょうど夕飯を食べている)

- (6) 这个青年 在 搬 行李。
この青年 ~ている 運ぶ 荷物
(この青年は荷物を運んでいる)

- (7) 我 给 客人 沏 茶 呢。
私 にお客さん 入れる お茶 ~ている
(私はお客さんにお茶を入れている)

(4)、(5)は「主体動作動詞」の例で、(6)、(7)は「主体動作・客体変化動詞」の例である。両者とも「動作の継続」を表す。二)「変化動詞」の場合、中国語も日本語と同じ、動詞の後ろに継続相(“着”)が付くと、「結果の継続」を表すことができる。

- (8) 大道上 停 着 一輛 車。
大通りに 止まる ~ている 一台 車
(お通りに車が一台止まっている)

- (9) 墙上 挂 着 画轴儿。
壁 かかる ~ている 掛軸
(壁に掛軸がかかっている)

しかし、このグループの動詞は日本語と違うところもある。それは、中国語の変化動詞の中には継続相を持たないものが少なくない。例えば、日本語の「結婚する」という動詞には「結婚する・結婚した」(完成相)と「結婚している・結婚していた」(継続相)があるが、中国語の“结婚”(结婚)は完成相の“结婚・结婚了”(结婚する・結婚した)しかない。一般的に“结婚着”(結婚している)の言い方はない。このような動詞は、ほかに“诞生”(誕生する)、“出生”(生まれる)、“死”(死ぬ)、“升职”(昇進する)、“合格”(合格する)、“失败”(失敗する)、“离休”(定年退職する)、“毕业”(卒業する)などが挙げられる。この動詞グループになると、主に主体の瞬間的変化が捉えられているので、ここでは、「瞬間的変化動詞」と呼ばれる。

- (10) 小狗 出生 了。
子犬 生まれる た
(子犬が生まれている／子犬が生まれた)

- (11) 腿 骨 折 了。
足 骨 折れる た
(足の骨が折れている／足の骨が折れた)

三)「心理活動動詞」については、中国語と日本語との間に大きな差異が見られる。中国人は感情を一時的なものにとるのではなく、常に存在しているものとしてとらえ、動詞の継続相ではなく、動詞の基本形で表す(例文(12)、(13))。

- (12) 他 非常 感谢 你。
彼 とても 感謝する あなた
(彼はとてもあなたに感謝している)
- (13) 我 衷心地 祝 你 幸福。
私 心から 祈る あなた 幸福
(私はあなたの幸福を心から祈っている)

「テンス・アスペクトの基本的体系表」と「動詞分類と継続相との関係」の中日比較を通して、中日両語のアスペクト表現の差異を大まかに明らかにした。本論はさらにその差異点を明示するため、何(1998)を参考にし、日本語のテイル形の基本的意味「動作の継続」、「結果の継続」と派生的意味「パーフェクト」、「習慣」に対する中国語の表現について説明していく。何(1998)は「日本語基本動詞用法辞典」(大修館書店)の動詞728例を全部中国語に訳し、中国語と日本語のアスペクト表現の相違を考察した。

I. 「動作の継続」

何(1998)によると、一時的に行う「動作の継続」を表す場合に中国語と日本語との間に大きな違いが見られず、中国語は日本語と同じ、継続相(“在”、“呢”)をつけると、「動作の継続」を表す。しかし、長く続ける「動作の継続」の場合に日本語では、動作の進行の一種として捉えるのに対して、中国語のほうは、現在存在しているある状況として、理解し、動詞の基本形で表現する。

- (14) 他 住 在 镇上。
彼 住む に 町
(彼は町に住んでいる)
- (15) 姐姐 在 学校 工作。
姉 に 学校 勤める
(姉は学校に勤めている)
- (16) 政府 允许 小卖店 夜间 营业。
政府 許可する 小売店 夜間 営業
(政府は小売店に夜間営業を許可している)
- (17) 他 希望 继承 家业。
彼 希望する 継ぐ 家業
(彼は家業を継ぐことを希望している)

(14)の例は“住”(住む)という動作は長期的に存在するものである。(15)の「所属・職業」も同じように理解してもよいだろう。(16)の例は恒常的な意味を表すのではないが、簡単に変わる状況でもなく、長く続けるものと見られている。(17)は“希望”(希望する)が心理活動を表す動詞である。「心理活動動詞」の場合、前に述べたように中国人は感情を一時的なものにとるのではなく、常に存在しているものとしてとらえ、動詞の基本形で表す。以上の分析により、中国語は日本語の「動作の継続」に対し、二つの表現がある。「一時的な動作の継続」を表す場合、中国語は日本語と同

じ、継続相（“在”、“呢”）を用いる。「長期的動作の継続」を表す場合、動詞の基本形で表す。

II. 結果の継続

何（1998）では日本語の「結果の継続」の例文を中国語に訳した際に、継続相の“着”をつけて表現するのが40例、完成相の“了”をつけるのは214例あるとしている。

まず、“着”を使う例文を見る。

(18) 他 戴 着 眼镜。
彼 かける ～ている めがね
(彼はめがねをかけている)

(19) 书架上 摆 着 书。
本棚 並ぶ ～ている 本
(本棚に本が並んでいる)

(18)、(19)の例文から見ると、動作が完了し、その結果が残り、目の前の状態になり、その状態に焦点を当てて、描く時、中日両言語とも、継続相を使う。

しかし、日本語の「結果の継続」の表現と違い、中国語は完成相の“了”をつけて表すのも圧倒的に多い。その例をあげると次のようになる。

(20) 洋子 去 学校 了。
洋子 行く 学校 た
(洋子が学校に行っている)

(21) 这个 青年 结婚 了。
この 青年 結婚 た
(この青年は結婚している)

このグループは中国人日本語学習者が理解するのに一番苦労する。日本語では継続相のテイル形を用いるのに対し、中国語では完成相の“了”を使用するのである。何（1998：247）の解釈によると、日本語では完成相のタ形は動作の完了を表すだけで、その動作による結果が現在まで残っている事実を示す場合、テイル形を使って表現するという。一方、中国語では、動作が完了したら、残るはずの結果がそのまま残って、「今でも存在している」とわざわざ説明する必要がないのであるとしている。しかし、この説明はやはり理解し難い点がある。動作による結果は「今でも存在している」とわざわざ説明する必要がない」と解釈したら、「結果の継続」を表すとき、中国語では、継続相“着”の使用も必要がないのではないかと考えられる。しかし、それに対して「動作による結果が現在まで残っている」こと、つまり「結果の継続」というアスペクト表現を「変化¹¹→結果→状態」とう過程で表すことができると筆者は考える。これはその前半即ち「変化→結果」に重点を置くならば、「変化」は既に「過去に起こったこと」なので、完成相“了”を使う（例文(23)、(25)）ことになるのに対し、逆に後半即ち

「結果→状態」に焦点を当てるなら、「状態」は現在の状態なので、しかも、いまでも継続・存在していることを示し、継続相“着”を使うと考えられる（例文(22)、(24)。“戴”（かける），“摆”（並ぶ），“开”（開く），“穿”（着る）などのような動詞グループは、場合により前半の「変化→結果」も後半「結果→状態」も表すことができる。つまり、完了相“了”も継続相“着”も使用できる（例文(18)、(19)、(22)～(25)）。“折”（折れる），“生”（生まれる），“去”（行く），“结婚”（結婚する）などのような動詞グループは、主体の瞬間的な変化しか捉えないので、前半の「変化→結果」だけを表し、完了相“了”を用いる（例文(10)、(11)、(20)、(21)）。

(22) 门 一直 开 着。

ドア ずっと 開く ～ている
(ドアが開いている)

→ ドアが開いている状態を表す

(23) 刚才 还 关 着 的 门 现在 开 了。
先ほどまだ 閉まる ～ている の ドア 現在 開く た
(先ほどまだ閉まったドアが現在開いている)

→ 「閉まる」から「開く」までの変化を表す。

(24) 她 穿 着 一件 红色 的 衣服。
彼女 着る ～ている 一着 赤い の 服
(彼女は赤い服を一着着ている)

→ 赤い服を着ている状態を表す

(25) 和 往常 不一样, 她 今天 穿 了 一件 红色 的 衣服。
と いつも 違う 彼女 今日 着る た 一着 赤い の 服
(いつもと違って、彼女は今日赤い服を一着着ている)

→ いつもと違う変化を表す。

III. 「パーフェクト」

中国語では「パーフェクト」は過ぎ去った過去のことで、テイル形のような継続相で表す発想が存在しない。何（1998）では、この用法に文末の“了”をつけて表現するのがほとんどである。例を挙げると、次のようになる。

(26) 他 因为 赤字 关 店 了。
彼 で 赤字 閉める 店 た
(彼は赤字で店を閉めている)

(27) 我 在这 儿 住 五 年 了。
私 で ここ 住む 五年間 た
(私はここに五年間住んでいる)

IV. 「習慣」

「習慣」は一時的に終わる事態ではなく、繰り返しにより長期的に存在しているのである。中国語は、日本語の「習慣」用法に対して動詞の基本形で表現する。

(28) 男孩子 总是 和 父亲 一起 干活。
男の子 いつも と お父さん 一緒に 働く

¹¹ 「結果の継続」を表すとき、使われた動詞は中日両語ともほとんど主体変化動詞である。

(男の子はいつもお父さんといっしょに働いている)

(29) 他 利用 摩托车 上班。

彼 利用する バイク 通勤

(彼は通勤にバイクを利用している)

5. 本論のテイル形分類の確立

本論はまずアスペクト表現のテイル形の意味に基づき、大まかに四つに分類する。それは、基本的意味として、「動作の継続」と「結果の継続」に設定し、派生的意味として「パーフェクト」と「習慣」に分ける。中国人の日本語学習者のためのテイル形分類を確立するために、日本語のアスペクト表現と中日両語のアスペクト表現の相違を踏まえながら、テイル形をさらに下位分類をする。

(一)「動作の継続」

既に考察したように、日本語の「動作の継続」に相応する中国語の表現形式は二つある。一つは、「一時的な継続」を表す場合、中国語は日本語と同じ継続相(“在”、“呢”)をつけて表現する。もう一つは、「長期的継続」を表す場合、中国語は常に存在している状況としてとらえ、動詞の基本形で表す。従って、本論では、「動作の継続」の下位分類は「一時的動作の継続」と「長期的動作の継続」にする。

(二)「結果の継続」

「結果の状態」には、中国語では、継続相“着”或いは完了相“了”を使う表現がある。継続相“着”を使う場合、「変化→結果」に重点を置く。完了相“了”を使う場合、「結果→状態」に焦点を当てる。それに基づき、「結果の継続」を更に「変化の結果」と「結果の状態」に分ける。

(三)「パーフェクト」

「パーフェクト」というアスペクト表現の場合、以上に分析したように中国語ではほとんど完了相“了”をつけて表す。今まで、「パーフェクト」についての下位分類が数多く行われ、中国人日本語学習者が「パーフェクト」用法をより一層理解するために、バーナード・コムリー(1988)と望月(1997)を参考にし、意味的に「パーフェクト」をさらに三つに下位分類した。それは「結果のパーフェクト」、「経験のパーフェクト」と「存続場面のパーフェクト」である。

a. 「結果のパーフェクト」は基準時より前のこと、つまり完了を表す。

(30) 他 两天前 已经 来 日本 了。

彼 二日前 もう くる 日本 た

(彼は二日前もう日本に来ていた)

(31) 十年 后, 我 该 生 孩子 了。

十年 後 私 ~に違いない 生まれる 子供 た

(私が十年後、子供を生んでいるに違いない)

b. 「経験のパーフェクト」は過去に起こった出来事を発話時(現在)と関連付けていることを表す。例示すると、(34)、(35)のようになる。

(32) 伦敦, 我 去 了(一点都不好玩)。

ロンドン 私 行 く た

ロンドンは前に行っている(けど、全然おもしろくないよ)。

(33) 我 已经 吃 木瓜 了(所以, 就别再叫我吃木瓜了)。

私 もう 食べる パパイヤ た

私はもうパパイヤを食べている(だから、これ以上パパイヤをすすめないで)。

c. 「存続場面のパーフェクト」とは、ある出来事が過去に始まり現在まで持続していることを指す。

(34) 他 住 在这里 十年 了。

彼 住む に ここ 十年 た

(彼はここに十年住んでいる)

(35) 我 在 那儿 买 了几年的 东西 了。

私 で そこ 買う た 何年か の もの た

(私は何年かそこで買い物している)

(四)「習慣」

中国語では、「習慣」のような一時的に変わらず、長期的に存在する場合、上記の(28)、(29)の例文のように動作の基本形で表現する。

6. おわりに

以上、テイル形の意味と、動詞と継続相との関係及び中日両語のアスペクト表現の相違を考察・分析した結果、中国人日本語学習者の立場から考えたアスペクト表現のテイル形を「一時的動作の継続」、「長期的動作の継続」、「変化の結果」、「結果の状態」、「結果のパーフェクト」、「経験のパーフェクト」、「存続場面のパーフェクト」、「習慣」という八つの項目に分けることができた。これまでの内容をまとめてみると、次の表になる。

	テイル形の意味	最終分類	日本語の動詞	中国語の動詞	中国語の表現
基本的意味	動作の継続	「一時的動作の継続」	運動動詞（主体動作・客体変化動詞と主体動作動詞）	動作動詞（主体動作・客体変化動詞と主体動作動詞）	継続相“在”、“呢”
		「長期的動作の継続」			動詞の基本形
	結果の継続	「変化の結果」	主体変化動詞	変化動詞（瞬間的変化動詞を除く）	完了相“了”
		「結果の状態」			継続相“着”
派生的意味	パーフェクト	「結果のパーフェクト」	—	—	完了相“了”
		「経験のパーフェクト」	—	—	完了相“了”
		「存続場面のパーフェクト」	—	—	完了相“了”
	習慣	「習慣」	—	—	動詞の基本形

参考文献

C.E.ヤーホントフ (1987)『中国語動詞の研究』白帝社
 パーナード・コムリー (1988)『アスペクト』むぎ書房
 庵功雄 (2001)『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
 奥田靖雄 (1978)「アスペクトをめぐって」『教育国語』53、54むぎ書房
 奥田靖雄 (1988)「時間の表現(1)(2)」『教育国語』94、95
 奥田靖雄 (1993)「動詞の終止その(1)(2)(3)」『教育国語』2.9・12・13
 王学群 (1999)「アスペクトと動詞の分類」(『中国関係論説資料』41号第2分冊下、論説資料保存会)
 何琳 (1998)「「～ている」に相当する中国語の表現から見た日本語と中国語」『中国関係論説資料』40号第2分冊(増刊) pp.455-463、論説資料保存会
 郭春貴 (2001)『誤用から学ぶ中国語：基礎から応用まで』白帝社
 金田一春彦 (1950)「国語動詞の一分類」『日本語動詞アスペクト』1976
 金田一春彦 (1955)「日本語動詞のテンスとアスペクト」『日本語動詞アスペクト』
 金田一春彦 (1976)『日本語動詞アスペクト』むぎ書房
 工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現』ひつじ書店
 高橋太郎 (1976)「解説 日本語動詞のアスペクト研究小史」『日本語動詞アスペクト』
 高橋太郎 (1995)『動詞の研究』むぎ書房
 国立国語研究所『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版、1985年
 左思民 (2002)「关于“着”的几个问题」(日中対照言語学会『日本語と中国語のアスペクト』) 白帝社
 讀井唯允 (2002)「コムリーのアスペクト論と日本語・中国語のアスペクト体系」(日中対照言語学会『日本語と中国語のアスペクト』) 年、白帝社)
 寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクタンズと意味II』くろしお出版
 守屋宏則 (1995)『中国語文法の基礎』東方書店
 朱德熙 (1988)『現代中国語文法研究』白帝社
 徐莉 (2006)「中国語のアスペクト表現“在”、“呢”、“着”について」『比較社会文化研究』第20号、九州大学大学院比較社会文化学府紀要
 植田渥雄、楊光駿等 (1998)『中国語の文法と使い方55』三修社
 町田健 (1989)「日本語の時制とアスペクト」アルク
 長麟声 (2001)『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉20例—』スリーエーネットワーク
 望月圭子 (1997)「中国語のパーフェクト相」『中国関係論説資料』41号第2分冊下 pp.415-423、論説資料保存会

望月圭子 (2002)「中国語アスペクト研究ノート」(『中国関係論説資料』44号第2分冊下、論説資料保存会)

李臨定 (1993)『中国文法概論』光生館

劉月華、潘文娒、故鞏 (1988)『現代中国語文法総覧』くろしお出版

A Revisit to the Classification of the te-iru Aspectual Expression-in the case of Chinese Learners of Japanese-

Ri JO

A lot of grammatical research on the te-iru form of Japanese has been done up to now. But we have not yet found a classification of the te-iru form with respect to Chinese learners of Japanese. In this paper, we analyzed the te-iru form for Chinese learners of Japanese based on both the aspectual expression of Japanese and on the difference of aspectual expression on Chinese and Japanese. We can conclude that the te-iru form of aspectual expression could be divided into eight classes: “Continuance of a temporary action”, “Continuance of a long-term action”, “Changed result”, “Resultant state”, “Perfection of the result”, “Perfection of the experience”, “Perfection of the continuing state”, and “habitual actions”.